あなたの生活に文学を

阿部 公彦

暑苦しくて心地よい幸福感

佐伯一麦「ななかまど、ローワンツリー」

佐伯一麦さんの「ななかまど、ローワンツリー」（「群像」2月号）はそんな作品です。妻の仕事を通じて親しくなった英国人夫妻。かつて日本を訪問し、そこでまさかの大震災。温泉旅館に足止めされます。今、英国訪問中の「おれ」は、妻ともども2人の世話になりつつ当時を回想します。

佐伯さんが何度も書いた実体験です。しかし、単なる「再利用」ではありません。文体や設定を変えることで、クラシック音楽のようなバリエーションの面白みが出る。言葉が煮詰まり、他方で「ついに語り得ぬもの」も浮かび上がります。

しかも、幸福感がある。なぜか。その説明の前に、一つ別の話題に触れましょう。

「すばる」2月号は「すばるクリティーク賞」。受賞作は赤井浩太さんの「日本語ラップfeat.平岡正明」でした。ヒップホップ批評でありつつ、文化論的な射程も持つ。冒頭は「身体のリズムで脳髄をジャックせよ」。著者は自分の文章に「身体のリズム」を与え、議論に血をめぐらせます。まさに言行一致。

たどり着くのは、「ヒップホップとは流民的な労働者の音楽、資本主義の現実に対して破壊的なリズムで震える音楽、どんな街からでも生みだせる音楽…」との境地です。ほとんど歌。私は米詩人ウォルト・ホイットマンの演説調の詩行を思い出しました。

ホイットマンと言えば文学史上の偉大な詩人。でも、先入観は邪魔です。率直に言えば、彼の美点は凡庸で不器用で目立ちたがりのナルシシストが、わけのわからないことを熱く語る「鬱陶しさ」にこそあるからです。

以前から気になっていることがあります。なぜ文学作品は「嫌なこと」ばかり書くのでしょう。辛さ、悲しさ、おぞましさなど不幸がたっぷり。

でも、もっと大きな謎があります。不幸ばかりなのに、なぜか幸福感をもたらすことがある。

絵・片山高志

これは間違いなくヒップホップの売りでもあるでしょう。では、批評でも「鬱陶しさ」や「暑苦しさ」を表現することは可能なのか。難しそうにも見えます。どうしても批評は、「ちょっと珍しいことをクールに言え」との縛りを受けるから。

でも、もし凡庸で熱い批評を持続的に書きつづけられれば、すごいと思う。身体もリアルも大事だけど、何より「うざさ」が作品に与える力は大きいのです。赤井さんの作品を読みながら、批評にこんなことができるんだ、と感心しました。

そこで佐伯作品に戻りましょう。「ななかまど、ローワンツリー」の魅力は何か。英国の小さな町の描写には、英語のリズムが聞こえます。異なる空気の中で、作家の呼吸法と書きぶりも変わったよう。

でもそれだけではない。ここにも特有の押しつけがましさがあるのです。たとえば古い硬貨や紙幣が店で使えなかったというごく「ふつう」のことを、佐伯さんは実に大切そうに「どうだ！」と語る。

佐伯さんの手にかかると大震災という希有な出来事も、しっかりと個人性を刻印された体験に変換されます。「どんなもんだ。これがおれだ」と語られる。

変幻自在 むずがゆさ満点

青木淳悟「憧れの世界」

たしかに暑苦しい。でも私はそれを快感と感じます。「どんなもんだ」と安心してわがことを語る主人公。それを受け入れる読み手。「読み」を介した信頼関係が生まれるのです。両者の協働から「愛の場」が作られる。

愛はしつこく、うざく、面倒くさいもの。でも、温かいし、ほっとする。その心地よさは忘れがたい。佐伯さんやホイットマンの作品は、つかの間、そんな心地をもたらします。「幸福感」の正体はこれだと思うのです。

「文学界」2月号には青木淳悟さんの力作「憧れの世界」。ただ「力作」との形容はこの作家に似合わないかも。変幻自在ののぞきの視点。絶妙のつっこみ。むずむずするギャグ。作品がするすると読者から逃げていく不安感がたまりません。

誰もが「ジブリ臭」に気づくでしょう。郊外のニュータウンに住む思春期の少女とどこか間の抜けた両親。図書館には秘密がたくさん。工房。おじいさんと少年。丘の上にぽっこり生まれる懐かしい異界と、夢の中の「死」が、少女を大人に導きます。路線バスのタイミングもまさにジブリ！

ジブリアニメ「耳をすませば」を参考にしたとのこと。でも、最初から最後までずっとむずがゆさ満点の、正真正銘の青木淳悟作品。文学の異界です。

（英米文学者）

象徴のうた

平成という時代

永田 和宏

42

掲出の一首は、平成25（2013）年11月、美智子さまが東京オペラシティに赴き、館野泉のピアノコンサートを聴かれた折の御歌である。

館野泉は20代後半よりフィンランに招待され、そこでベリウスの「アのようにお声がかかり、さらに美智子さまが筆談で「私にも弾かせてください」とおっしゃったという。そして、シベリウスの「樅の木」を自ら弾かれたのであった。

もう少しと、お声がかかり、さらに美智子さまが筆談で「私にも弾かせてください」とおっしゃったという。そして、シベリウスの「樅の木」を自ら弾かれたのであった。

のになったのは平成5年、心無い中傷によって倒れ、声を失われた時であった。

失意の美智子さまを励ますためであっただろう、館野は赤坂御所に招待され、そこでベリウスの「アのようにお声がかかり、さらに美智子さまが筆談で「私にも弾かせてください」とおっしゃったという。そして、シベリウスの「樅の木」を自ら弾かれたのであった。

失はれし音ゆびさきより生れて鳴るかの日「もみの木」を弾きたまひし君

紀宮（平成9年）

御歌とお言葉集」）。母君を最も案じ、常に寄り添いながら献身的な介護をされたのが紀宮さまであった。声としては失われてしまった「音」が、いま「ゆびさきより」溢れてくるように感じられたのに違いない。翌日、紀宮さまから館野に電話があり「昨夜は母が言葉を取り戻すかと思いました」と喜びを伝えられたという。この「ア

皇后（昭和53年）

静けくも大きくましし君にして「見ず」とはいはず亡きを嘆かむ

皇后（昭和62年）

歌の師の五島美代子、佐藤佐太郎を悼む御歌である。1首目は「目さむればいのちありけり露ふふむ朝山ざくら額にふれぬて」（美代子）、2首目は「杖ひきて日々遊歩道ゆき人とごら見ず」と所詮人

はのれんあい

窪 美澄・作
合田 里美・絵

〈20〉

第一章 かぞくのはじまり（二十）

えーっと、そういうことでいいのかな。智久から言われた言葉が胸のなかに残ったまま、由紀子は何も話さず、食事を済ませた。台所で使った食器を片付けていると、

「智晴、風呂にいれるよ」と、智久が由紀子の背中に声をかけた。

「うん。お願いします」

洗いものの手を止めて、由紀子は智晴の着替えを準備した。

智久の下着を手にしたまま、由紀子は考える。思い返せば、母親である邦子に対して、智久が何か意見のようなことを言ったり、反抗している姿を見たことはない。仕事場では茂雄もそうだ。智久には、「そうじゃないだろう」「なにやってんだ」と声を荒らげることがあるのに、妻に対しては、そんなことは一言も言わない。邦子が間違ったことをしても、

責めることはない。どこか気を遣っている。

そうか、智久の家族では、邦子がいちばん強いのか、と由紀子は思った。そして、自分の育った家庭を思い浮かべた。母は思ったことをぽんぽんと何でも口にする性格だが、それは父も同じだった。二人の言い合いは喧嘩とも呼べず、掛け合いの漫才を見ているようなものだった。由紀子の家族のなかでは、父と母は同じくらいの力を持っていて、上下関係などなかった。

アルバイト情報

月曜・木曜 掲載

求人情報は、信毎 Job Station でもご覧いただけます。
http://job.shinmai.co.jp/

長野市内
清掃スタッフ急募
内容 契約先企業様での清掃業務
場所 1）本郷 2）七瀬中町 3）若穂 4）若里 5）市場（特別清掃）
時間 1）7時～9時 2）7時半～11時半

長野駅前
洗い場・掃除パート募集
内容 1：洗い場 2：客席（フロアー）の掃除
時間 洗い場18：00～23：00 掃除 13：00～16：00

長野市稲里町
パートさん募集
職種 クリーニングプレス・包装 軽作業
時間 午前9時～午後5時（相談に応じます。）

長野駅前
長期パートさん募集
場所 ながの東急百貨店 B1
内容 健康食品・自然食品の接客販売
期間 長期できる方
時間 9時半から18時半 週5日

長野駅前
短期アルバイト大募集！
期間 2月14日（木）までの短期
内容 バレンタインギフトフェア販売
時間 10：00～19：00

求人広告掲載のお問い合わせは
信濃毎日新聞広告取扱い広告会社
または
信濃毎日新聞社 広告局広告部
TEL026-236-3333
広告料金